

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第28号（令和2年3月）

歩（あゆむ）、史男（ふみお）
ミドリ、文じい（文蔵）

歩 「今日は、“西光寺”だって？」
ミドリ「そう、ほら、すごいでしょ。
ずうっと石段が続いている！」
史男 「石柱に“時宗 福寿山 西光寺”と
彫られている。それに、正面左右に
“桐のご紋”。“時宗”というのは？」
文じい「一遍という僧が開いた浄土教の一宗派。
仏教はお釈迦様が説かれたが、その後、
弟子に受け継がれると、教えの解釈や考
える方向に違いができて、日本の宗派は
十三宗となっておる。」
ミドリ「上に赤い色の立派な山門が見えるわ！」
史男 「鐘楼、つまり鐘撞き堂も見えるね。」



歩 「石段は、何段くらいあるのかな？」
史男 「108段あるらしい。」
歩 「えっ！そんなに！」
文じい「以前に数えたことがあったが、108まで
はなかった。あとからのご住職の話の中
に、本堂までの段を加えて108段という
ことじゃった。」
ミドリ「除夜の鐘を108ついて、煩惱を取り除く
などとよく聞くわね。」
歩 「“ぼんのう”とは何のこと？」
文じい「人間に付きまとう迷いの心じゃ。石段を

こんどう あみださんぞんりゅうぞう

金銅阿彌陀三尊立像

けんほんごくさいしき あみだによらいぞうぞ

絹本極彩色阿彌陀如来像図

福寿山 西光寺

登り、煩惱を乗り越えようとしながら本
堂にたどるとのことじゃろうの。」
歩 「さあ、本堂だ。中もすごいな！」
史男 「ご本尊様にお参りしなければ。」
文じい「ふむ、よく拝ませてもらおう。」
ミドリ「指定文化財が2つあると聞いたけど、そ
の1つがこのご本尊様ね。」
文じい「秘仏なので、奥にいらっしゃる。目の前
のご尊像は前立ての像なので、写真を持
ってきた。これがそうじゃ。」
史男 「これが、“金銅阿彌陀三尊立像”だね。」
文じい「中尊、つまり真ん中の尊像は、阿彌陀
如来像。左側に立つ脇侍像は、観音
菩薩像、右側は、勢至菩薩像。」
ミドリ「板碑にも三尊というのがあったわね。」



ミドリ「金銅ということは、銅でできているの？」
史男 「初め土でおおよその形をつくる。それに

ロウを塗って像の形をつくる。そして、その周りをまた土でかこみ、それを焼く。」

歩 「土はかたくなり、ロウはとけちゃうな。」

ミドリ「わかったわ。ロウがとけてすきまができたところに、とけた銅を流し込むんでしよう。何かの本で見たことあるわ。」

史男 「その通り！」

文じい「ふむ、それが鑄銅製ということじゃな。それに、鍍金仕上げ、つまり、金メッキで仕上げている。」

文じい「実はこの仏様の並びは、“善光寺式阿弥陀三尊像”と言われる形で、鎌倉時代によく造られたらしい。もっとも善光寺の三尊像はまだ誰も見てはいない秘仏じゃ。」

歩 「やっぱり秘仏か。それで、手や指は？」

文じい「阿弥陀如来像は、右手が“施無畏印”で、こわがることはないと言い、左手は、“刀剣印”で、邪気を払う。脇に立つ両菩薩像は、“梵篋印”で、胸の前で両手を重ねて、手の中には真珠の薬箱を持っておられると言うのだが・・・。」

ミドリ「すごいご本尊様なのね。ところで、もう一つのものとはどれなのかしら？」

文じい「庫裏の方に掲げられておる。」

歩 「あ、これだ！ 仏様が雲に乗っている。」

ミドリ「夢のような不思議な世界だわ！」

史男 「文化財一覧には、“絹本極彩色阿弥陀如来像図”。絹本極彩色というのは？」

文じい「絹の布に濃い絵の具をくり返し塗り、鮮やかな色彩に仕上げたものじゃ。」

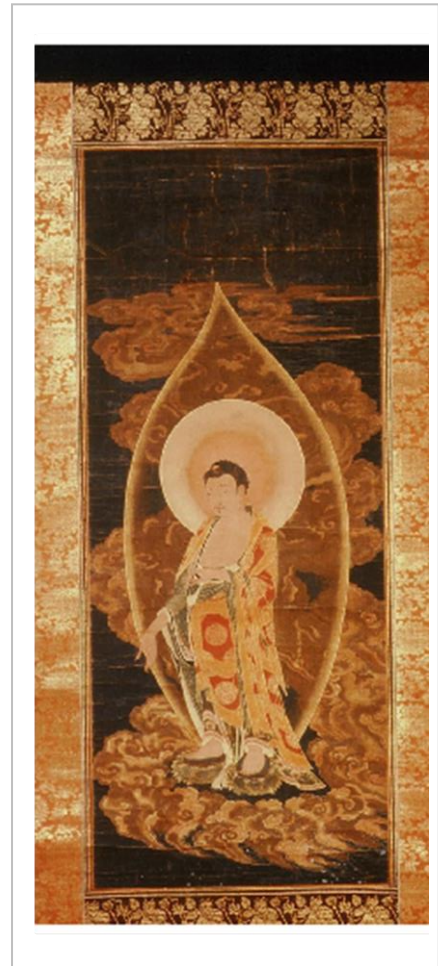
ミドリ「なるほど、それで色の迫力が伝わってくるのね。ところで、これはどういう様子を表しているのかしら。」

文じい「来迎する阿弥陀如来を描いておる。」

史男 「来迎といえば、確か前に聞いたな。極楽浄土からお迎えが来るとか・・・。」

文じい「よくおぼえていたな。阿弥陀如来様が、五色雲に乗り、招くような手ぶりでお迎えに降りてこられた様子じゃな。」

ミドリ「ゆったりとしながらも、堂々としたお姿



で、安心しておすがりしたくなるわ。」

歩 「後ろに光っているものは？」

文じい「丸いのが“頭光”。その奥に、蓮の花びらの形の“身光”じゃ。来迎図には、三尊のもの、二十五菩薩を連れたものもある。」

ミドリ「誰がいつ頃描いたのかしら？」

文じい「“尊海筆五十三歳”という字と印が見える。室町時代の天永6年(1526)、芝法眼尊海という絵師の作ということのようじゃ。さらに、裏に、西光寺三十七代現阿というお坊さんの署名もあるという。」

史男 「西光寺は、美咲町の土山にあって、その後、松山に移ったけれど、そこに、殿様の別荘“松山御殿”を建てるといって今石崎になったと聞いている。古くから、いろんな歴史をきざんできたんだね。」

ミドリ「すばらしくありがたいものがあり、奥の深いお寺だったわ。」